

旧植田家だより

KYU-UEDAKE INFORMATION

Vol. 15

2013年1月発行

コンサート八尾の音楽家

旧家で JAZZ

連続講座2012-第2期-

八尾に残る映像

講座

安中新田分間絵図を読む
& お吟さまのフカーい話



<http://kyu-uedakejutaku.jp/>

展示のご案内

2013年
1月9日(水)～
2月25日(月)

休館日=火曜日、1月16日(祝)・2月13日(祝)
開館時間=午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
【観覧料】一般200円、高校・大学100円、中学生以下は無料
【主 催】NPO法人MICAL

平成24年度 冬季企画展
道具からみる
ちょっと
むかしの暮らし
展

<関連企画>
ギャラリートーク(展示解説)
▶ 2月11日(祝) 14:00～

【交通案内】
① 京大和路線「八尾」駅下車、南出口より徒歩約3分
② 近鉄本線「八尾」駅から徒歩約15分(徒歩駅まで)
③ 京大和路線「八尾」駅下車、南出口徒歩約5分
※当施設には駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

八尾市指定文化財
安中新田会所跡 旧植田家住宅
〒581-0084 大阪府八尾市緑町1-1-29 <http://kyu-uedakeputaku.jp/>

冬季企画展

「道具からみる ちょっとむかしの暮らし」

2013年1月9日(水)～2月25日(月)

旧植田家住宅に残された昭和の道具を中心に、人々の暮らしの
移り変わりや道具の歴史を振り返ります。

※休館日はP15をご覧ください

次回企画展

○2013年3月1日(金)～4月29日(月)

「植田家にのこされた河内木綿」

Contents

- 4 コンサート 八尾の音楽家
「旧家で JAZZ」
- 6 講座「やすなかしんでんぶんけんえず安中新田分間絵図を読む」
- 7 講座「直木賞受賞作“お吟さま”のフカーい話
～作品をめぐる物語～ 余話」
- 8 連続講座2012—第2期—
八尾に残る映像
- 10 旧家で楽しむ落語会
- 11 旧家で愉しむ食事会
- 12 なにわの伝統野菜栽培日記⑮
- 13 植松のまち・ひと—第9回
- 14 コラム「落穂拾い - 今東光の薫風 - (九)」
- 15 旧植田家住宅のご案内



表紙写真

コンサート「旧家で JAZZ」

2012年10月14日、旧家を舞台にスタンダードジャズやミュゼットジャズの名曲の数々が、鍵盤ハーモニカの音色にのせて届けられた。このコンサートの様子は、本誌4・5頁に掲載。

(写真は開演前の舞台の様子)



※『旧植田家住宅だより』のバックナンバーはホームページからダウンロードができます。
<http://kyu-uedakejutaku.jp>



コンサート 八尾の音楽家

旧家でJAZZ

演奏：織野ナオ ピアノカカルテット



ロイヤン尾茂(ギター)



橋田正和(ドラムス)



織野ナオ(鍵盤ハーモニカ)



荒木俊秀(ベース)

きゆうか 旧家でJAZZ

コンサートは、ジャズのスタンダード《ハウ・ハイ・ザ・ムーン》〜《オーニソロジー》で幕を開けた。旧植田家住宅初となるジャズコンサートでは、八尾市在住のドラム奏者・橋田正和さんが参加する「織野ナオピアノカカルテット」に出演していただいた。

コンサートの序盤、秋(月夜)をイメージして選曲したという《枯葉》と《アーリー・オータム》は、ピアノの甘い音色がギターとベースの音と重なり、ドラムスのリズムの上に鳴り響いた。続いて、ロイヤンさんのギター・フィーチャーで、ビートルズのナンバー《抱きしめたい》が演奏された。解説された歌詞の意味を想いながら客席は静かに聴き入った。織野さんのトークでは、八尾の印象やこのコンサートについて語られ、「ジャズは自由です。いつでもイエーイと言ってください」と楽しみ方も教授された。また今回使用する楽器の紹介が行なわれた。

織野さんの使用する鍵盤ハーモニカは二台あり、一台は小学校で使うピアノカとおなじようなもので、もう一台はイタリア製の楽器



でアコーディオン会社（バロンブリーニ社）
が作った「エオリーナ」という。木製の美し
いデザインに、アコーディオンのような明る
く、それでいてたおやかな音色がとても魅力
的だ。さらに日本に二台しかないというから
とても希少な楽器でもある。

その「エオリーナ」の魅力を余すところな
く引き出したのが、続く《ラ・ジャヴァネー
ズ》と《パリの空の下》だった。ミュゼット
ジャズの情緒漂う音楽が観客の心をとらえ、
アコーディオンを彷彿させる豊かなその音色
に、フランスの風景をイメージせずにはいら
れなかった。会場そのものを音楽が包み込み、
この伝統的な日本家屋がフランスの街並みへ
と変えられていくような、そんな気分だった。

楽器「エオリーナ」を演奏する織野さん

コンサートは後半に入り、
グレン・ミラーでおなじみ
の《ムーンライト・セレナー
デ》と日本のちあきなおみ
の《黄昏のビギン》がしつ
とりと演奏された。トーク
中、グレン・ミラーの名前
が出てこない織野さんに会
場から「グレン・ミラー！」
と助け舟が出される場面も
あり、客席と演奏者との距
離感の近さや交流がとても
印象的だった。

続く《バチーダ・チフェ

レンテ》は、あまり耳慣れない曲だが、ボサ
ノヴァの世界で活躍したドゥルヴァル・フェ
レイラ（一九三五～二〇〇七）の作曲で、この
演奏ではギターソロをはじめ、それぞれのソ
ロが堪能できた。また、指を鳴らして始まる
軽快な音楽に、客席は首を動かしリズムをとっ
ていた。

今回一番人気の《月の沙漠》は、タイトル
は内緒ということで演奏を始めたが、知って
いる童謡がジャズにアレンジされているのを
聴き、とても新鮮であった。朗々と奏でられ



るヴィブラートはまるで演歌の
こぶしの如し。またドラムソロ
も際立ち、哀愁と激しさが表
裏一体となって伝わった。

最後は、ドラムをフィー
チャーした《スピーク・ロウ》
が演奏され、「ジャズを楽しん
で」という織野さんの言葉とお
り、演奏者も会場も一緒になっ
て大いに盛り上がった。そして
興奮さめやらぬままコンサート
は、アンコールの《ハーティド》
をもって終演を迎えた。

4人が織り成す音楽と生音ライヴの素晴らしさが、
会場の雰囲気とあいまって、この古民家を贅
沢なライヴハウスへと変えたようだった。普
通のライヴハウスや
バーであれば、お酒を
片手に音楽…というのが
最高の贅沢といった
ところであるが、お酒
の出ないここ旧植田家
住宅では、全員が音楽
に酔いしれた。



11月11日(日)

講座

「安中新田分間絵図を読む」

正徳元年(一七一二)に作成された「安中

新田分間絵図」(以下、分間絵図と表記)は、

旧植田家住宅の根幹を支えていると言っても過言ではないほど大切な資料です。とい

うのも、旧植田家住宅が大和川付け替えに

よってできた安中新田の会所(管理事務所)

だったことが判明したのは、この絵図のおかげだからです。今回の講座では、八尾市

立歴史民俗資料館から小谷利明氏をお招き

し、分間絵図から読み取れるさまざまな事柄についてお話をさせていただきました。

分間絵図は、縦約一・五メートル、横約六・

五メートルの巨大な紙に、約三〇〇分の一のスケールで描かれています。そこに書か

れた情報からはまず、安中新田の中には安福寺が所有する新田と、他の開発主体が所

有する新田があることがわかります。つま

り、安中新田というのはいくつかの開発主体を持つ新田の総称だということです。ま

た、新田開発以前からの農地である古田(こでん)の

ほか、墓地、公道、私道などの存在も読み

取れます。そして、最も重要なことは、農地の大きさ(それぞれの区割りの縦横の長さ)が記されていることです。

今回のお話の中で一番面白かったのは、

その大きさが実際とはかなり違うということでした。小谷氏を中心とした「八尾古絵

図研究会」のみなさんが実測された結果、

絵図に書かれた数値より、実際の数値のほうが大きかったというのです。それも数十

メートルという単位で。道幅などについて

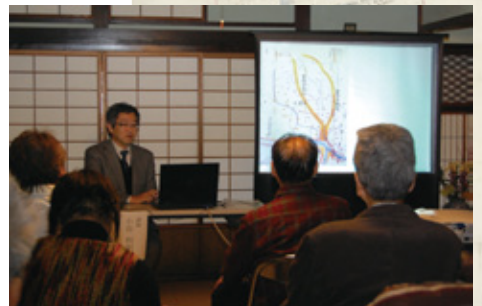
はほとんど誤差がないということなので、当時の測量技術に問題があったというわけ

ではないようです。これはいったいどうい

うことなのでしょうか。

小谷氏によると、これは税を軽減するた

め、悪く言えば税をごまかすための絵図なのではないかということでした。確かに、



分間絵図について語る小谷利明氏

これだけ大きな絵図が作られていたら、そこに書かれている情報は正確なものだと思込んでしまいます。また、絵図の数値を見て、現場に行ってみても、よほど慣れている人でなければ、見ただけでは気づかなかったことでしょう。さて、この事実を知っている人は当時どれだけののでしょうか……。

分間絵図の原図は修復され、現在は旧植田家住宅の収蔵庫に大切に保管されています。そのかわりといつてはなんです、展示室の床面に原寸大のレプリカが常時展示されていますので、地域の歴史を考えるきっかけとして、ぜひ一度ご覧いただければと思います。

(旧植田家住宅学芸員 宮元正博)

直木賞受賞作

“お吟さま”のフカーい話

～作品をめぐる物語～ **余話**

伊東健（今東光を語る）

一編の小説が世に出て、単行本として出版される背景には数多くの人が関与します。今東光の出世作と言われる『お吟さま』においても同様ですが、丁寧なその背景を見ていくことで、面白い発見があることを今回の講座ではお伝えしたかったつもりです。

登場人物は、作者・今東光（五八歳）、挿絵・三輪晁勢（五五歳）、装幀・和田三造（七三歳）、編集・白井史朗（三六歳）。

（ ）内は、昭和三十一年当時の年齢です。

深い人生をたどってきた人々の特色ある仕事、ひとつの作品に結実していく様子を知ることができる、テレビの※「プロフェッショナル」を観るような楽しさです。後に、この作品に直木賞が与えられるとは、夢にも思っていない人々の情熱が心を打ちます。

今東光は、昭和二六年に八尾市の天台院に転居し、妻と実母との三人暮らし。住職としての生活の傍ら、小説創作への熱意を隠しま

せん。河内・八尾という新天地で、昔と変わらず「絵本太閤記」「國女歌舞妓繪詞」等の古典世界に遊びながらも、現実生活では実母の介護を行う東光に降臨する創作の新たなミューズ。

そんな東光に白羽の矢を立て、千利休を連載小説のテーマとして提示した淡交社の若き編集者である白井史朗の慧眼と機敏な行動力には、学ぶところが実に多い。

テーマを与えられた東光が、在原業平、高山安山、大和川等が持っている河内の歴史を、利休の娘・吟に結びつけ、語り部として彼女を“お吟さま”と呼ぶ女性が誕生します。

挿絵の三輪晁勢は、東光の意図を反映させ、南蛮文化華やかな桃山世界を描き、利休の茶道を新たに表現したかと思えば、異例の連載終了と同時に直木賞受賞で沸き立つ中で急ごしらえの単行本刊行において、和田三造も絢爛たる意匠を本にほどこしてくれました。ファックスもメールもない時代、三人の間を走り回る白井氏によって、当時の京都・大阪文化圏の精髓をそろえた離れ業は実現されました。

東光の居住地であったがゆえに八尾が創作舞台の中心にすえられるという、史上稀なる

奇跡的な瞬間がここにはあります。とはいえず、人生の瞬間を交錯した仕事師たちは、拘泥することなく、新たな仕事に向かいます。東光は一連の小説群である河内風土記シリーズで一世風靡、三輪は後に日本芸術員賞を受賞、和田は直後に文化功労者に選ばれ、白井は淡交社に欠かせない存在となります。

改めて「人と契らば浅く契りて末とげよもみじ葉を見よ 濃きがまず散るものに候」という『お吟さま』の一節を思い出し、珍しく八尾が舞台である現代文学史上に残る劇的な出会いの物語に思いを馳せています。



淡交社発行
（昭和32年2月）
カバー単行本
装幀：和田三造

カバーをめくると…



淡交社
連載第1回目
（昭和31年1月）
挿絵：三輪晁勢



八尾に残る映像

植田家や八尾市に残る数々の貴重な映像を紹介！

当時のくらしの記憶がよみがえる！？



植田家の映写機



9.5mm フィルムと缶

旧植田家住宅の土蔵一には現在、昭和初期の「映写機」と「フィルム編集機」などが展示されています。これがあるということは当然フィルムも残っているだろう。ということ今回講座では、このフィルムに焦点を当て、実際に残されていた植田家の映像を観賞しました。

第1回 「植田家に残された映像」

連続講座二〇一二・第二期では、「八尾に残る映像」をテーマに取り上げ、全三回にわたって、植田家や八尾市に残された映像資料を見ながら、解説を行いました。あまり知られていない八尾市の記録映像や植田家にのこされた貴重なフィルムなどが往時の生活の様子を伝えます。

植田家には、昭和の初め頃に普及した十六ミリフィルムと、ちょっと珍しい九五ミリフィルムが合計二十七本も残されていました。またそれらの映像資料は、後年植田家によってテレシネ（フィルムをビデオやDVDに変換する作業）されており、今回はそのビデオをフィルムの歴史とともに紹介しました。

映像は大きく分けると、当時の植田家で撮影された「家族映像」と、旅行や観光・見物などの「記録映像」に分類でき、その他、当時商品として売られていた映画や漫画(初期のアニメ)、風景などの「映像作品」なども含まれていました。現代のように誰でも簡単に映像を楽しむことのできる時代と比較すると、当時、映像の撮影・編集・観賞は極上の娯楽であったことが想像できます。

今回は、植田家の昭和に思いをはせながら、貴重な映像を心ゆくまで堪能しました。また、記録映像に映っていた「忠魂碑」が、現在も八尾に残っていることが判明し、大きな発見もありました。



記録映像「忠魂碑」より

第2回&第3回

「八尾に残された映像」

第一回目では「植田家に残る映像」を取り上げましたが、第二回と第三回目では、二回にわたって八尾市が製作した周年記録映像を中心に紹介しました。

まずは、昭和二十三年制作の記録映像「大八尾市」。八尾町・龍華町・久宝寺村・大正村・西郡村の五カ町村が合併し、人口約六万五千人で八尾市として発足した当時の様子が無声・モノクロの十八分間にまとめられています。初代脇田幾松市長や初市会の様子、市制誕生祝賀会、これから伸びていく産業、鉄道や物流の様子など。戦争が終わり、日本の民主化政策を受け、将来に向けてはばたこうとするエネルギーが感じられる映像です。



第2回講座の様子



市制施行記念の記録映画
「大八尾市」(昭和23年制作)

昭和二十六年からの『市勢要覧』も併用しながら、順を追って観た四〇周年の映像では、高架工事中の近鉄八尾駅の様子や完成したばかりの文化会館「プリズムホール」での式典の様子。五〇周年では、市民活動を中心とした様々な取り組みの様子が紹介されています。各々の映像にその当時のまちや人の様子、行政の思いなどを読み取ることができ、とても興味深いものでした。

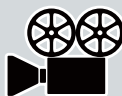
参加者からは「(八尾市に)こんな映像あったんですねー。」「これってどこで観れるんですか?」「図書館とかで貸し出せばいいのに!」などの反応がありました。資料として配布した八尾市年表や古い『八尾市時報』(当時の市政だよりの様なもの)のコピー、初代脇田幾松市長の「大八尾市構想」についての資料なども、なかなか目にする機会がなかったものでした。これをきっかけに、あまり注目されることのない八尾市の現代史に興味を持ってもらえたかなあと思います。



第3回講座 (解説は吉井清子氏)

八尾再発見!

映像に見る八尾



旧植田家住宅では、十一月三日(土)の夜七時より「八尾再発見!映像に見る八尾」が開催されました。内容は、連続講座と連動して、「大八尾市」の上映を行いました。また、連続講座では紹介できなかった八尾市の映像(「八尾風土記軍鶏」も鑑賞し、参加者とともに「八尾のイメージ」について考えました。

「大八尾市」の映像解説のほか、当施設スタッフの実体験に基づく八尾の昔話がメインとなり、話を聞くことで、用意された写真や映像の資料がよりリアルなものとして感じられました。短い時間でしたが、参加者同士の交流の場ともなり、それぞれ八尾を再発見してもらう、良い機会となりました。



スタッフによる映像の解説



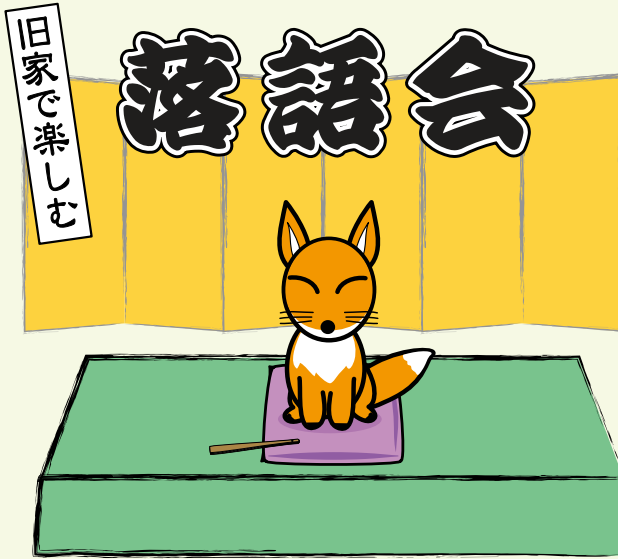
写真資料をみつめる参加者



猪名川亭 蓮光「金明竹」



日向亭 葵「時うどん」



ああ面白かった。

旧植田家住宅で落語会を催すのは、開館以来、今回が初めてです。出演者は落語みゅーじあむ（※）のアマチュア落語講座修了生四名の方々。座敷につくられた即席の高座とラジカセから流れるお囃子で、はじまりはじまり。

演目は「金明竹」「時うどん」「尻餅」「宿替え」。いずれも今とは様変わりした、昔の商売や暮らしがなつかしく感じられる面白おかしいお話。

時間が経つにつれ、みんなリラックスしてきた様子で囃家さんと客席との一体感が漸をより面白く感じさせてくれます。

前の席には、お母さんと一緒の小学生の女の子がいます。囃の中の聞き慣れない言葉の説明をお母さんから耳元で聞きながら楽しんでいきます。女の子には気軽に落語を体験できる良い機会ではなかったでしょうか。

いつの間にか、自分は知らず知らず、囃の先の笑いどころを想像して、たびたび思い出し笑いをしてしまいました。会場の熱気とお腹から笑える体験は、久しぶりに気分を爽快にさせてくれました。また次回の落語会が楽しみです。

落語みゅーじあむの猪名川亭 蓮光、日向亭 葵、猪名川亭 青波、天満家 夢造の皆様ありがとうございました。

平成二四年十月二八日 参加者

※落語みゅーじあむ

「落語のまち池田」にある市立として日本初の上落語資料展示館。二〇〇七年四月にオープン。名誉館長は六代目・桂文枝。



猪名川亭 青波「尻餅」



天満家 夢造「宿替え」

旧家で愉しむ食事会



11/29 旧家で愉しむ食事会

一世紀タイムスリップした気分を味わいました。初冬の宵、植田家の門をくぐるとその一歩目から幻想的な空気に包まれます。

学芸員の方に館内と大津絵についての説明を聞いている間に、客間にはお膳の用意ができていました。「植田家の食器で食事を頂く」というテーマにそって、古の雰囲気も漂わせて、植田家の庭で収穫された野菜も使った料理が並べられていました。

料理は趣向を凝らした初冬の味わいでした。一の膳・二の膳と美味しくボリュームもあり満足のいくもので、客一同食事や食器に話が盛り上がり、椀の蒔絵を見せ合ったりしながら和気藹々^{わきあいあい}と時間が過ぎていきました。

二の膳が運ばれる前には、学芸員の方からこの日のために床の間に特別に掛けられた、お軸と屏風についての説明があり、ここにもテーマにそった演出があることに心遣いを感じました。



一の膳
(このあと煮物が運ばれる)



二の膳
(このあと椀物が運ばれる)



会話も盛り上がり、和気藹々と時間が過ぎる

また、一の膳にはなつめ酒、食後にはなつめ茶が出され、なつめの実ができる夏から計画した心をこめたものがふるまわれました。この食事会では、たくさんの方々の行き届いたもてなしを受けることができ、あたたかい気持ちで家路につくことができました。

(参加者)

なにわの伝統野菜 栽培日記

No.15



収穫後の記念撮影！

←フェスティバルに出場する大根。
おめかしして準備中(写真上)



【おそるべし、〇〇水】

十二月九日、今年も田辺大根フェスタが開催された。この日は、前日からの寒波で、冷たい風が吹く寒い日だったが、会場は、たくさんの方で賑わっていた。

しかし、昨年に続き、またもや成長がイマイチな旧植田家産の大根。前号でお伝えした「ワラフイーユ」(土とワラを交互に積み重ねたもの)で育てた物は、他と比べると、成長具合は、かなり良いものの、フェスタ一週間

前までは、女性の手首ほどの太さしかなかった。そこで、肥料について調べていた時、たまたま目にした、ある小学生の「観察日記」を思い出した。それによると、市販の納豆をペットボトルに移し、水を入れて数日置き、納豆のエキスが染み出た「なっとう水」なる物を二十日大根(ハツカダイコン)に毎日与えたと、この小さいはずの大根が、大人のこぶし大ほどになったそう。

…よし。それ、頂きま〜す(笑)という事で、さつそく納豆を用意し、数本の大根に与えてみる事に。しかし、毎日なっとう水を作るのは厳しい。そこで、大根の株元ギリギリに納豆を置き、薄く土をかぶせ、その上から少しずつ水をやった。すると、たった一週間で、ほぼ倍の大きさにまで育ったのだ。これには、さすがにビックリ！もし、興味のある方は、試してみたいかがでしょうか？(あくまでスタッフの実験結果で、全ての野菜の成長促進に効果があるかは分かりません。)ちなみに、この「なっとう水」、か・な・り・においしますので、予めご了承のほどを。



* 結果発表 *

最初が小さすぎたせいか、ちから及ばず、三度目の「でっかいDE賞」となった。あと一週間後なら…残念！また次回に期待です。

そして、近隣の永畑幼稚園の園児と一緒に育てた大根は、しっかりとおめかししたかいあって、「かわいいDE賞」をいただいた。出陳者が多い中、共に受賞できた事はうれしい限りです。



【おいしいね】

フェスタの前日、子どもたちと大根を収穫し、試食をした。この日は旧植田家住宅の避難訓練と重なったため、味噌汁のみの試食となったが、いつも通り、大鍋いっぱい味の味噌汁は全て子どもたちのお腹に収まった。

今回は二月の中頃、金時人參の収穫だ。一番寒い時期。さて、子どもたちは来るだろうか？「試食」と「寒さ」、どちらが勝つやら。



収穫！



試食！

植松のまち・ひと

第九回

◇おもちつき大会

いつもの「植松のまち・ひと」とは少し変わって、今回は二〇一二年の十二月二十三日に、旧植田家住宅で開催された「おもちつき大会」の様子をお伝えする。

毎年年末に開催される旧植田家住宅のこの恒例行事は、例年百名を超える参加者とともに大いに盛り上がる。かまどで蒸したもち米を昔ながらの杵と石臼を使っておもちにしていく。また、つきたてのおもちを参加者と一緒にまるめたり、試食するのが特に楽しみである。

この行事には植松の地域に住む人たちがたくさん参加し、また外部からもやって来

「昔のくらしを体験。」

地域をつなぐおもちつき大会」

るところが、今年は何やら参加者の数が激減した（それでも七十名程が参加）。どうやら今年は、他のいくつかの場所でも「おもちつき大会」が開催されていたらしく、そのために人数が分散したという。

もちつきが地域に与える影響は大きい。昨今の少子化や高齢化にともない、地域の行事の数が減ったり、ご近所同士の付き合いが希薄になる中、おもちつきには多くの人たちが集う。また、おもちつきは一人では決してできない。これが人々をつないでくれるきかけとなる。

ここ旧植田家住宅の「おもちつき大会」も、子どもから大人まで、地域の人たちを中心に、今年も賑わいを見せた。

マンジークン

安富士 暁



つきたての「もち」を丸める



子どもから大人まで、みんなで「おもちつき」

「おもちつき大会」で
ご近所付き合い!?



かまどで「もち米」を蒸す

落穂拾い

| 今東光の董風 | (九)

文・伊東健

文楽の人形への関心を抱きながら、河内と結びつけた今東光渾身の快作が「河内の顔」だといえます。昭和三十五年二月に『小説新潮』誌上で発表された短編小説は、同年六月に同名の単行本が講談社から刊行されています。

お久という女性を主人公に、彼女の母親をめぐる三人の男、太吉・真太郎・安夫の人生を回想しながら、人々の生きた歴史・時代背景を透かしてみせる叙述は、東光が既に発表していた短編「夜の客」で見せた技法であります。三人の男の職業が、農業・商業・工業ときれいに分けられるところも、創作上の技術であります。お久が生まれる前の物語には河内・八尾の庶民史が濃厚に反映されています。自らの出生の秘密にたどりつき、母と同様に男に翻弄されながらもたくましく生きようとするお久が、はじめに文楽を観賞する場面が描かれます。

おっさんは言ってから文楽座の人形芝居の話をするのだ。けれども生れてから一度も見たことのないお久は、どうしても人形劇というものがぴんと来ないのだ。二人の間の年齢のずれが同時に時代感覚のずれにもなっているらしい。(中略)

舞台では人形が溜息をついたり、大きな欠伸をしたりする。

「まるで生きてみたいやわ」

「せやろ。人形が生きて息してるみたいやろ」

(中略)

「人形にはみんな御正念が入ってるさかいな。粗略にいかへんね。人間のするみたいにお床入りがあつて、まことの夫婦みたいにするんやて」

「へえ。はじめて聞きました」

「せやさかいに、よう見とき言つてんね。人形が泣く時は、ほんまの涙が出るみたいやろ。あれが生きてる証扱や」

「ほんまに生きてはりま」

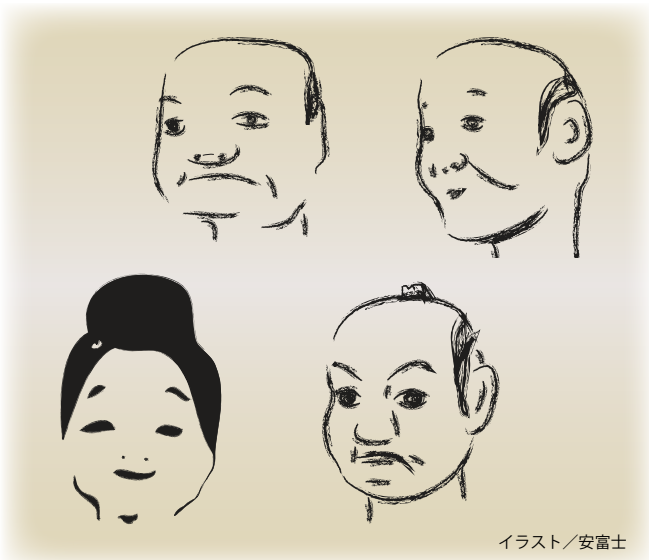
(後略)

人形の涙とお久が流してきた涙が重なるとき、一人の人形遣いが捧げるようにして

運んできた人形の一群の顔に、河内で生きた人々の顔を見出し出すラストは、ぜひ作品を読んでお楽しみください。



『河内の顔』講談社発行
昭和35年6月
装丁：三岸節子



イラスト／安富士

旧植田家住宅のご案内

今後の展示・企画

※毎月第1土曜日は「河内木綿体験(5名限定)」
第3日曜日は「むかし遊びの日」を開催

展示

—2013年—

◎1月9日(水)~2月25日(月)
企画展「道具からみる
ちょっとむかしの暮らし」

※2月11日(祝・月)に「ギャラリートーク」を開催

☆1月9日(水)~2月3日(日)
施設周辺写生作品展示(ギャラリー)

◎3月1日(金)~4月29日(月)
企画展「植田家にのこされた
河内木綿」

展示、イベント等のお知らせは
ホームページもご覧ください
<http://kyu-uedakejutaku.jp/>

企画

◎2月 9日(土) 連続講座Ⅲ(全3回)「土蔵でくらしっく②」

◎3月 2日(土) 連続講座Ⅲ(全3回)「土蔵でくらしっく③」

◎4月

※4月以降の予定は、現在 調整中です。
決定次第、ホームページ他で掲載します。

(詳しくはお問い合わせください)

休館日カレンダー

■ = 休館日

2 February

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

3 March

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

4 April

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

●開館時間:午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで)

●休館日:火曜日・祝日の翌日・年末年始
(詳しくは休館日カレンダーをご覧ください)

●入館料:一般200円(団体20人以上で100円)
高校・大学生100円(団体50円)
※中学生以下、身体障がい者手帳等の
所持者および介助者は無料

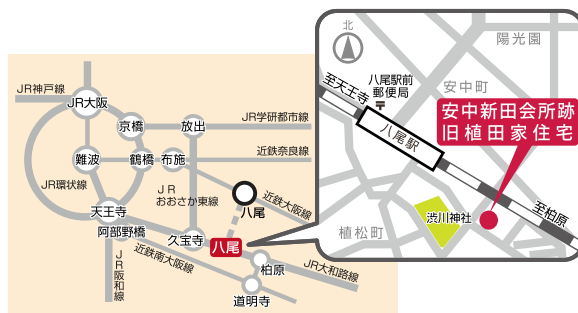
●お問い合わせ

〒581-0084 八尾市植松町1-1-25

TEL/FAX:072-992-5311

E-mail:info@kyu-uedakejutaku.jp

※当施設には駐車場はありません。車での来館はご遠慮ください。



◇JR大和路線「八尾」駅下車。南出口より徒歩約3分
◇近鉄大阪線「八尾」駅から近鉄バス藤井寺駅前行
JR八尾駅前バス停下車。南東へ徒歩約6分

株式会社シーズクリエイトは、 「チラシ印刷」と「社会への取り組み」で 世の中を元気にしていきます。

ホームページが新しくなりました > <http://seeds-c.co.jp>

社会への取り組み

3月開催の協カイベント

9(土)

八尾バル <http://yaobar.net> 実行委員募集中! 私たちと一緒に八尾バルを盛り上げてくれる方募集中です。

八尾の美味しい農産物とよりすぐりのお店を結んだ「地産地食」飲み歩き食べ歩きイベントです。チケット1枚で1ドリンクと八尾産の旬食材を使った一品を味わえるおトク感とおいしさ満載の1日です。第4回目は、河内山本エリアへも拡大! 旬の食材は「八尾若ごぼう」!

チケットについて

チケットは5枚つづりで前売り3,000円(当日3,500円)でお求めいただけます。
2月9日よりWebまたは一部参加店舗でチケット予約販売開始!

お問い合わせ

八尾バル実行委員会TEL:090-7592-5502 (広報担当:高野)
E-mail: info@yaobar.net



八尾バル
"Living and Loving"

私たちが好きな街、私たちが好きな店。

23(土)

ハッピーアースデイ大阪 <http://www.happy-earthday-osaka.jp>

年2回、八尾の久宝寺緑地にて開催される日本初の学生主体のアースデイ、「ハッピーアースデイ大阪」。八尾から発信し、多くの方々と地球環境に対する想いを共有していきたいと思えます。

今回のテーマは『Pay for the Earth - 未来へつなぐお買いもの-』。
身体や自然、未来の地球のことを考えて、未来につながる買い物しようというメッセージが込められています。

One Step for Action! マイ食器でごはんを食べよう!

ハッピーアースデイ大阪では、ゴミを減らすため、マイ食器の使用に取り組んでいます。なお、レンタル食器は利用手数料がかかります。

